

# ドローン爆弾殺害事件

テロ



春日信彦

---



# 目次

ドローン爆弾殺害事件 .....	1
------------------	---



## ドローン爆弾殺害事件

1

8月27日（土）美緒は、約束の時刻は午後2時であったが、遅刻しないように、九大学研都市駅北口近くのコメダに午後1時40分に到着した。東側の窓際テーブルの椅子に腰かけていた美緒は、ちょっと不機嫌そうな表情でミツフィーちゃん腕時計を見つめた。腕時計の長針は約束の午後2時を回っていた。ユリは、10分を過ぎても、まだ現れなかった。昨日のラインでは、是非、相談に乗ってほしいと深刻なメール内容だった。ユリが時間にルーズであることはいつものことで、美緒はいらだちを抑えて窓の外をぼんやりと眺めた。15分を過ぎた時、入り口のドアから赤のトレーナーに両ひざが丸見えのジーンズ姿のユリが飛び込んできた。美緒を見つけたユリは、笑顔で美緒の前の席にドスンと腰掛けた。

全く反省の色が見えないユリは、ウェイトレスが注文を取りにやってくるとアイスマルクティーとシフォンケーキを注文した。美緒を見つめたユリは、ちょっと緊張した表情で話しかけた。「私にとっては、ちょ～深刻なことなのよ。相談に乗ってくれるよね」どんな相談なのか全く見当がつかなかったが、美緒はうなずいた。テーブルにアイスマルクティーとシフォンケーキが並べられるとユリは、ミルクティーを一口すすった。ユリは、ダイエット中と言っていたが、ケーキを注文していた。美緒は皮肉を言った。「ダイエット中じゃなかったの？」ユリは、一瞬固まったが、即座に、返事した。「今日だけは、許して。ケーキを食べないと、気持ちが落ち着かないのよ」

ユリは、生クリームを乗せたシフォンケーキを一口ほお張り、ニコッと笑顔を作り目を細めた。気持ちが落ち着いたようで一つ大きく深呼吸すると話し始めた。「何といえがいいのか、私のこと、狂っているとか思わないでよ。ちょっと、何から、どういえがいいのか、あ～～どうしよう。ヤッパ、恥ずかしい～。バカげてるような気もするし。ヤッパ、やめよかな～」美緒は、あきれた顔でユリの顔を覗き込んだ。「さっきから、なに、ぼやいてるの？相談があるんだったら、言えればいいじゃない。どんな相談でも、聞くぐらいは、聞いてあげるわよ。さ～言いなさいよ」ユリは、まだ、言うべきかどうか悩んでいるようだった。

ユリに恋愛の悩みがあるとは、到底思えなかった。看護師をやめて、対馬の田舎に帰るのだろうか?確か、お母さんも、看護師と言っていた。もしかしたら、母親に、対馬に帰ってくよにせかされているのかも?美緒が、勝手な想像をしているとマジな顔つきになったユリが、姿勢を正した。「よし、人生は、一度。玉砕が、何だ。美緒、聞いてくれる?気持ちは、固まった」美緒もマジな顔つきになり、大きく頷いた。「どんなこと。何でも言ってちょうだい。できる限り、協力するわ」ユリは、グイッと生唾を飲み込んだ。目を大きく見開き、少しかが見込むとつぶやくように話し始めた。「あのね、外科に、今田先生がいるでしょ。私ね、あの手の渋い中年男性が好みなのよ。うまくいくかしら?」

美緒は、首をかしげた。今田先生は、外科で、ユリは、内科。全く関係はない。うまくいく必要はなかった。「うまくいって? 今田先生は、外科じゃない。ユリは、関係ないでしょ」ユリは、ちょっと恥ずかしそうにつぶやいた。「いや、そういうことじゃなくて。ほら、男と女の関係よ。今田先生は、私をどう思っているのかな〜てこと。すれ違って、全く気にしてないような気がして」美緒は、全く意味が分からなかった。今田先生は、寡黙な50歳を過ぎた白髪の外科医だった。23才の女性と50才過ぎたオジンの男女の関係など、全く想像もつかなかった。「ねえ、男女の関係ってどういうこと?まさかとは思うけど、あのオジン先生と付き合いたいってこと?」

俯いてしまったユリは、頷きながらつぶやいた。「その、まさか。うまくいくと思う?どうすればいい?何か名案はない?」美緒は、全く理解できなかった。ユリは、少し、狂っているとしか思えなかった。今田先生は、妻帯者であり、しかも、参議院議員の奥さんは、恐妻とのうわさがある。万が一、不倫が発覚すれば、ユリは、絞め殺されるかもしれない。ユリは、わかっているのだろうか?「確認するけど、うまくいって言ったけど、今田先生とうまく付き合えるかってこと?冗談よね」ユリは、目を吊り上げて、美緒を見つめた。「マジよ。今田先生と付き合いたいのよ。どうすればいいかを相談してるんじゃない。美緒以外、相談できる人いないし〜」

## 2

美緒は、返事に困ったが、とにかく、自分の考えを話すことにした。「ユリ、冷静になるのよ。付き合いたい相手は、白髪のオジンなのよ。ユリとは、30歳以上年上なのよ。ユリには、年相応の付き合える人がいると思うの。どうして、あんなオジンと付き合いたいの?いったい、どこがいいの?」すべてを否定されたユリは、肩を落としてしょげてしまった。しばらく黙っていたが、ゆっくりとつぶやき始めた。「年のことは、関係ないの。とにかく付き合いたいのよ。奥さんに、わからなければ、いいんじゃないの?結婚し

たいて、言ってるわけじゃないし。ただ、付き合うだけなんだから。どこか、ヘン？」

美緒は、言葉に詰まったが、気持ちを傷つけないように説得することにした。「今田先生は、妻帯者なのよ。しかも、奥さんは、国会議員で、頭に角がある恐妻という噂もあるし。万が一、不倫がばれたら、ユリ、絞め殺されるかもよ。こんな、ヤバいことはやめときなよ。ユリは、若いじゃない。そうだ、今度、合コンやろう。私が、イケメン集めてやるから」ユリは、ぼんやりと窓の外を眺め、人の話を聞いている様子ではなかった。美緒は、ユリの顔を覗き込み念を押した。「ユリ、言ってることわかるでしょ」魂を抜かれたようなユリは、静かにつぶやいた。「オジンよね～。でも、オジンじゃないとだめなのよ。若い男性は、全く、感じないのよ。付き合いたいと、思わないのよ。なぜか?今田先生、食事に誘ってくれないかな～?」

美緒も年上が好きだったが、オジンは好きではなかった。ユリは、ちょっと、いや、かなり変態ではないかと思えた。万が一、妊娠でもしたら、どうするつもりなのか?念のため、確認することにした。「付き合うっていうけど、万が一、子供ができたらどうするつもり。結婚はできないのよ。辛い思いをするのは、ユリなのよ」ユリは、ゆっくりうなずいた。「そうね。結婚なんて、望んでないし。子供ができたら、シングルマザーになる。それでいいんじゃない」美緒の額から、生汗がにじみ出ている。「シングルマザー? 何言ってるのよ。今田先生、奥さん、生まれてくる子供のことは、考えないの。自分のことだけ、考えれば、いいってもんじゃないと思うよ」

ユリは、目を丸くして返事した。「自分のことだけ?え、それは、真逆よ。先生にも、奥さんにも、迷惑をかけないように、シングルマザーになるんじゃない。確かに、生まれてくる子供には悪いような気もするけど、私が責任もって育てる」美緒には、これ以上の説得ができそうもなかった。ユリは、能天気な話を続けた。「とにかく、何か、きっかけがないと先に進まないのよね～。今のところは、全く眼中にないもんね。今田先生は、私のような小太りは好みじゃないのかな～。私の魅力をわからせる方法はないかな～?」美緒は、なんとなくホッとした。どんなに、ユリが今田先生を好きになっても、今田先生が見向きもしなければ付き合うことはできない。美緒は、心でクスクス笑っていた。

名案を思いついたユリは、笑顔で身を乗り出し話し始めた。「そうだ、これは名案よ。美緒の誕生日は、9月17日じゃない。誕生日パーティーに、先生を招待すればいいのよ。当然、私も。どお、うまくいくと思わない」美緒は、あまり気が乗らなかった。というのは、今田先生は、美緒に気があると直感していた。もし、誕生日パーティーに今田先生を招待すれば、美緒が今田先生に気があるように思われてしまう。これは、まずい展開になるような不吉な予感がした。美緒は、先輩看護師から今田先生には、近づかないよ

うに念を押されていた。今田先生は、かつて看護学生と問題を起こし、お金で解決したとのことだった。「今田先生を招待するの?それって、美緒が誤解されるじゃない。今田先生も男なんだから」

ユリは、「お願い、この通り」と顔の前で手を合わせて懇願した。「レストランを予約すれば、きっと来てくれると思う。当然、今田先生には、ユリのことも伝えてよ。そうすれば、今田先生も気が楽じゃない。とにかく、誘ってみてよ。食事では、ユリの魅力をガンガンアピールするから、バストには、自信あるし。きっと、気を引いて見せる」美緒は、不吉な予感をぬぐい切れなかったが、ここまで懇願されては、断れなくなってしまった。「いいけど。ところで、17日は、非番なの?美緒は、非番だけど」ユリは、笑顔で返事した。「非番よ。今田先生は、どうかしら? 午後だったら、問題ないんじゃない。早速、今田先生に声をかけてみて。あ〜〜ワクワクしてきた」不倫できたとしても、不倫はきつとばれる。美緒は、殺傷沙汰にならないようにと心で神に祈った。

### 3

ユリは、すべてうまくいったと思ったのか、残りのシフォンケーキを食べ始めた。美緒は、今田先生の視線を思い出していた。美緒は、過去の男性経験から、男性のスケベ心を即座にキャッチすることができた。あの視線は、美緒の体を求めていると確信できた。一回でも、誘えば、きっと誤解するに違いない。ユリに気が移ればいいが、そううまくいくような気がしなかった。女の中から見て、ユリは、顔立ちはよく色白ではあるが、女の色気にかけている。ユリは、どうやって今田先生を誘惑する気だろうか?男を誘惑した経験があるようにも、思えなかった。今田先生と会食できても、ユリの体を求めなければ、目的は達成できない。

シフォンケーキを食べ終わったユリは、美緒に質問した。「美緒の彼氏って、どんな人?」美緒が一方的に好きになっている鳥羽がいたが、鳥羽が美緒のことをマジに好きなのは自信がなかった。かつては、30代の中年男性の彼氏がいたなど言えば、ユリに同性癖とみなされてしまう。この場は、とりあえず、鳥羽を彼氏にすることにした。「医学生。ここの」ユリは、鉄砲玉を食らったハトのように目を丸くし、身を乗り出して応じた。「え、医学生。マジ? マジ?」首をかしげたユリは、美緒の言葉を信じられないでいた。ユリは、内心、美緒には彼氏はいないと思っていた。美人でもなく、140センチそこそこのチビで、小太りの体型の美緒に、医学生の彼氏がいることを受け入れられなかった。

ユリは、自分を美人とは思っていなかったが、美緒に比べれば、背は高く、頭もよかつ



た。多少は太っていたが、どう考えても、美緒よりはモテると自負していた。高校生の時は、2年間付き合った彼氏がいた。見栄を張っているに違いないと思ったユリは、医学生時代の彼氏について突っ込みを入れた。「何時から付き合ってるの?部活で知り合ったの?」鳥羽とは、高校2年生の時から知っていたから、どんな質問にも答えられる自信があった。実のところ、鳥羽が彼氏になったのは、今年の5月からだった。そのため、鳥羽が、美緒のことをマジに好きなのかは自信なかった。というのも、美緒が離島の診療所建設費用を援助すると約束した時、鳥羽はその言葉に心を動かされ、美緒の誘いのままにHをしてしまったからだ。

美緒は、ユリの猜疑心に腹が立ったが、鳥羽の気持ちがどうであれHをしたことを思い出し、胸を張って返事した。「高校の時から付き合い。なんとなく気があったみたい」ユリは、まだ信じられなかった。頭の悪いチビブ〜と秀才医学生は、どんなに考えても不釣り合いだった。でも、高校からの付き合いと聞いて、嘘ではないと思えた。ユリは、一度、医学生の彼氏に会ってみたくなった。「そいじゃ、彼氏を紹介してよ」鳥羽は、彼氏として紹介されるのを嫌がるように思えたが、ここまで話をしてしまうと、引っ込みがつかなくなった。美緒は、自慢の彼氏を紹介するかのよう胸を張って返事した。「いいわよ。学生だから、日曜日がいいと思うけど。そうだ、もしかしたら、今、暇してるかも?電話してみる」

美緒は、スマホで鳥羽にコールした。2回のコールで鳥羽の声が返ってきた。美緒は、即座に尋ねた。「授業、終わった?」鳥羽は、今終わったことを伝えた。「そお、それじゃ、今から、駅前のコメダに来れる?紹介したい同僚がいるの。3人で夕食どう?」鳥羽は、即座に向かうと返事した。鳥羽は、寮に戻ると服を着替え、シルバーのスズキアルトワークスに乗り込みアクセルを吹かした。このアルトワークスは、美緒に買ってもらった中古車だった。度々食事をおごってもらい、さらに車までも買ってもらっていた。今では、美緒の執事のようにになっていた。美緒は、自慢げな顔つきでユリに告げた。「寮からだから、1時間ぐらいで、つくと思う。3人で食事しようか」

ユリは、どんな彼氏がやってくるのか胸が高鳴っていた。同時に、内心、美緒に負けたようで、熱く真っ赤に燃え上がるドロドロとしたマグマのような嫉妬心が胸の奥底から噴き出していた。また、この程度の容姿の美緒に医学生の彼氏がいることが今だ信じられなかった。ユリも、医学生の彼氏を持つことを何度も夢見たが、結局かなわなかった。なのに、自分よりレベルの低い美緒に医学生の彼氏がいることがなぜか許せなかった。ますます、嫉妬心が大きくなり右手で太ももを爪跡が残るほど強く握りしめていた。また、自慢げな顔を殴りたくなる衝動を必死に抑えていた。「彼って、頭はいいけど、いつもドジってるのよ。子供って感じ」美緒の言葉が耳に入ると我に返り笑顔を作った。

ユリは、燃え上がる嫉妬心を悟られないように平静を装い、ゆっくりと返事した。「そう、まだ、学生なんだから。でも、美緒って、モテるのね。ユリにも医学生の彼氏を紹介してくれないかな〜」美緒は、心の底でクスクスと小さな声で笑うと返事した。「私に言われても、それじゃ、鳥羽君に頼んでみれば?」真に受けたユリは、試しに医学生の紹介を頼んでみることにした。美緒は、ユリの嫉妬心を感じ取っていた。でも、白髪のおジンと不倫するよりは、医学生を追っかけてくれる方が、女子らしくて健全なように感じた。嫉妬心を和らげるために少しよいしょすることにした。「ユリは、若いんだから、医学生とか研修医とかにアタックすればいいのよ。ユリだったら、できると思うけどな〜」

ユリは、何度も医学生にアタックしようと思ったが、ふられるのが怖くて行動に移すことができなかった。美緒は、医学生に追っかけられるほどの美貌の持ち主じゃないから、何か、医学生を引き付ける何か秘策があるに違いないと思った。やはり、恋愛は、一か八か、行動に移すことかもしれないと密かに思った。一旦、関係ができるとゲットできるような気もしてきた。まだ、自分に自信が持てなかったが、美緒を見習ってとにかく行動に移すことを心がけることにした。3時半を過ぎたところに、浅黒い顔の男性がボソッと入口から顔をのぞかせた。店内に足を踏み入れるとその男は、能天気な顔で店内をキョロキョロと見回した。美緒は、鳥羽を確認すると手を振って合図した。美緒を確認した鳥羽は、二人が腰掛けているテーブルに小走りでかけていった。美緒の横に腰掛けるように手招きされた鳥羽は、ちょっと大柄な女性に会釈するとそっと腰掛けた。

美緒は、同僚を紹介した。「こちらは、内科勤務のユリさん。同期の桜ってとこかな」ユリは、男性を目の前にすると固まってしまった。心では、強気なことを言っているが、いざ、男性を目の前にすると緊張して言葉が出なくなるのだった。「は、はい、美緒さんの親友です。ユリと申します。宜しくお願いします」ユリは、頭が真っ白になって、言葉が出なくなった。鳥羽も自己紹介した。「安部医科大の学生です。美緒さんとは、高校時代からの知り合いです。こちらこそ、よろしく」本番に弱いユリは、顔を真っ赤にして、次の言葉を探していた。美緒が助け舟を出した。「鳥羽君、どこで食事しようか?ユリは、なにが、食べたい?」ユリは、まだ固まっていた。美緒の堂々とした態度に完敗だった。どんなにあがいても美緒のような胆の据わった心持には到底なれそうになかった。

美緒がポンと手をたたいた。「まむしはどう?鳥羽君」鳥羽は、即座に返事した。「それはいい。お刺身、牛肉、てんぷら、どれをとっても、おいしいよな〜。久しぶりだな〜。今日は土曜日だし、ユリさん、二丈まで足をのばしませんか。まむしの湯で食事して、お風呂に浸かって、ゆっくりされてはどうですか?」ユリは、まむしの湯には一度も行った

ことがなかった。ユリは、是非、行ってみたくなった。「ここから、どのくらいかかるんですか？」鳥羽は、即座に返事した。「車だったら、40分弱で到着します」3人は、それぞれ車で来ていたが、2台で行くことを提案した。「ユリさんの車は、美緒さんのマンションにおいて、2台で行きましょう。美緒さん、OK？」美緒も賛成だった。「それがいい。それじゃ、まずは、美緒のマンションね。ユリは、美緒の後についてきて」

先頭は、美緒のスズキクロスビー、次は、ユリのホンダフィット、3番目に、鳥羽のアルトワークスが追尾した。ユリのフィットを美緒のマンションに置くと二台の車でまむしの湯に向かった。この日はすいていたため、浦志から、ゆっくり走って、30分弱で到着した。運良く、玄関前に駐車空きがあった。3人は、靴をシューズボックスに押し込み、お食事処、十坊（とんぼ）に向かった。奥のテーブルの空きを確認した3人は、素早くテーブルについた。美緒は、お品書きをユリに手渡した。ユリは、ダイエット中にもかかわらず、ケーキを食べたことを反省し、カロリーが低めなものを注文することにした。「みんな、おいしそうね。刺身も天ぷらも食べたいんだけど、う〜、鯛茶漬け、にする」鳥羽は、天刺膳、美緒は、七福膳を注文した。食事を堪能した3人は、お風呂から上がり、しばらくお土産品を見て回った。午後7時前を確認した鳥羽は、帰る合図を送った。

5

#### 監督

2台の車が美緒のマンションに到着すると鳥羽は、ご馳走になったお礼を美緒に伝え、アルトワークスで帰路についた。ユリは、美緒のマンションでしばらくコメダでの話の続きをすることにした。ユリが、キッチンテーブルにつくと美緒は、ティファールの電気ポットでお湯を沸かし始めた。お湯が沸くとティーポットにティーバッグを2個入れ、お湯を注いだ。ティーカップに紅茶を注ぐとユリの前に差し出した。美緒がまむしの湯の感想を尋ねた。「どうだった、まむしの湯？」笑顔を作ったユリは、軽やかな声で返事した。「鯛茶漬け、とってもおいしかった。刺身も天ぷらも、食べたかったんだけど、ダイエット中だから、今は、じっと我慢。次は、ガッツリ食べたいな」

ユリのご機嫌な様子に安心した。美緒は、鳥羽についての感想も聞きたくなった。「鳥羽君って、勉強ばかりやってるけど、意外と心配りあるのよ。医学生って、感じ、しなかったでしょう」ユリは鳥羽の気さくさに意表を突かれた。威張って、人を見下したような医者態度に接していたため、鳥羽の気さくで朗らかな態度に、全く、医者らしさを感じなかった。医学生は医者とは違って、威張らないのかもと思った。「ほんと、気さくで、優しく、理想の彼氏って感じ。あ〜〜どうして、ユリには、彼氏ができないの？美緒がうらやまし〜」鳥羽を彼氏にできたのは、資金力だと自覚していたが、このこ

とを口にはしたくなかった。ユリは彼氏ができないと悩んでいるが、どういう出会いで彼氏ができるかは、だれにもわからない。出会いを大切にすればいいように思えた。

美緒は、コメダでの話の続きを始めた。「ところで、マジで、今田先生と付き合いたいの？」ユリは、大きくなずいた。「マジよ。年の差なんて、関係ないんじゃない。ばれないようにやれば、付き合えるんじゃない。問題は、誘惑できるかよね。ちょっと自信ないのよね」美緒は、ユリの性体験を探ることにした。「ユリの気持ちは分かった。ユリが言うように、うまく誘惑しないと、逆に嫌われるかもよ。ちょっと聞きたいんだけど、一度ぐらいは、経験あるのよね？」ユリは、困惑した表情で返事した。「ないわよ。誘惑できるようだったら、とっくの昔に、彼氏、できてるわよ。何というか、そういうの、苦手なのよ」美緒は、恋愛経験を尋ねてみた。「何人かは、付き合ったこと、あるでしょ」

ユリは、気まずそうに顔をしかめて返事した。「それが、高校の時、付き合ったことはあるんだけどね。勇気がないというか、実行力がないというか、いざとなると、逃げちゃうのよね」美緒は、念のために確認した。「ということは、まだ1回もないってこと？」ユリは、俯きながら小さくなずいた。美緒は、あきれてしまった。「ということは、処女、でパパ活するってこと。ちょっと～。それって、無理スジじゃない。今は、中高生でも、パパ活やってるから、パパ活を否定しないけど、ユリは、10代じゃないんだから、肌で勝負はできないわよ。どうやって、誘惑するつもり？」ユリは、肩を落として黙り込んでしまった。

しばらくすると、ユリは、つぶやき始めた。「これって、パパ活なの？そうか、不倫なものね。パパ活よね。いいのよ、パパ活でも。あの手のタイプが好きなんだから。とにかく付き合いたいのよ。でも、女子高生じゃないし、飛びついてなんか、来ないわよね。ヤッパ、あのとき、思い切って、やってればよかった。いまさら、嘆いても仕方ないか」美緒は、先輩ゆう子とのことを思い出した。ゆう子も彼氏ができず悩んでいた。でも、ゆう子に、何度も、恋愛特訓をやってからは、徐々に誘惑の演技が真に迫ってきた。ユリも特訓すれば、誘惑の演技ができるようになると思えた。「ユリ、誘惑の演技ができるようになるには、繰り返しの特訓しかないのよ。何ととっても、せりふとしぐさね。一緒に頑張りましょう」

ユリは、小さくなずいた。「でも、今も言ったじゃない。やったことがないって。もう、手遅れってことね。美緒は、医学生の彼氏をゲットできたのよね。美緒は、何歳の時に処女を捨てたの。かなり、経験があるでしょ」美緒は、自分の性体験を聞かれて戸惑ったが、ゆう子をリードしたように、ユリもリードするには経験を話すべきだと思った。「まあ、捨てたのは、中学の時。高校生も社会人もやった。あの頃は、能天気で、何

も考えてなかったし、成り行き任せよ」ユリは、大きなため息をついた。「美緒は、勇気があって、いいね。ユリは、ダメね。全く、実行できないんだもの。ヤッパ、ユリって、魅力ないのかな〜。最近、声をかけられることもないし。恋愛もできない、パパ活もできない。もう、オワコンか」

6

美緒は、落ち込んでしまったユリがかわいそうになってきた。なんとなく、ゆう子と同じ状態じゃないかと思えてきた。ゆう子の場合は、容姿的にはモテたが、恋人の死による心の傷が恋愛を邪魔をしているようだった。ユリの場合はどうだろうか?容姿的には特に劣っているようには思えないが、今一つ、色気がないように感じる。だから、男性が飛びつかないし、ユリも積極的になれないのではないかと、少し、臆病なのかもしれない。ユリに必要なものは、やはり、真に迫った誘惑の演技力を身に着けさせること。となれば、特訓しかない。とにかく、やる気を起こさせないと。まずは、よいしょして、元気を出させよう。「ユリに足りないのは、恋愛の演技力よ。顔はかわいいんだから。誘惑のテクニックを身につければ、きつとうまくいくはず」

かわいいと言われたユリに笑顔がこぼれた。「そお、恋愛の演技力をつけるのね。でも、全く、経験がないのに、どうやって身につけるの?これこそ、ムリってものよ。美緒に何か名案でもあるの?」美緒は、ゆう子との体験を話すことにした。「高校時代のことなんだけど、当然処女で、ユリのように恋愛ができなくて悩んでいた先輩がいたの。それで、美緒が男役になって、その先輩に、恋愛の特訓をやってあげたの。何度かやってあげたら、真に迫る誘惑ができるようになったの。自信がついたのか、すごく明るくなって、彼氏ができるようになったのよ。ユリも、恋愛特訓、やってみる?」

ユリは、宝塚の話だと思い、返事した。「それって、宝塚ってこと。先輩みたいに、うまくいくの?美緒が男役になって、誘惑の特訓をやるんでしょ。うまくいくんだったら、やってもいいけど。恥ずかしい気もするし」美緒は、もう少し説得した。「最初は、恥ずかしいかもしれないけど、女の色気が増して、誘惑のテクニックもつくと思えば、決心がつくんじゃない。女は、何ととっても、色気なのよ。現に、先輩は、人が変わったぐらい色っぽくなったし」ユリは、少しやる気が出てきたが、まだ恥ずかしい気持ちが強かった。「でも、美緒が相手でも、色っぽいしぐさをするんでしょ。体型には、自信ないし。もう少し、スリムになればいいんだけど。この体型だし」

ユリの気持ちは、かなり動いてきた。ちょっとした恥ずかしさを取り除いてやれば、かたさが取れて、色気を引き出せると思った。「そうね〜、あ、ユリは、お酒飲める?」ユリ

は、色白で、ぽっちゃり顔なので、一見飲めないように見えたが、実は、ビールもウイスキーも、チューハイも、大好きだった。小太りになった原因は、恋愛できないストレスをお酒で紛らわせていたからだった。ユリは、大好きで毎日のように飲んでしたが、そのことは恥ずかしくて言えなかった。「いや、まあ、多少は、飲めるけど」美緒は、お酒が入れば、羞恥心が和らぐと感じた。「それじゃ、ちょっと飲みましょう。そうすれば、気が楽になって、恥ずかしさも、フツ飛んでいくから。それじゃ、ビールで乾杯して、ハイボールね」ユリが、甲高い声で返事した。「え、今から飲むの？ 車なのよ」

美緒が即座に返事した。「泊まればいいじゃない。美緒は、非番だけど。ユリは？」ユリは、ちょっと微笑んで返事した。「遅番。それじゃ、泊まっていこうかな。ちょっとお酒が入れば、やれるかも」美緒は、励ました。「その意気よ。お酒が入れば、気も楽になるし、とにかく、後は、大船に乗った気持ちで、美緒に任せて。必ず、ユリの色気を引き出してやるから。泊まり決定。時間はたっぷりある。まずは、お風呂に入って、それから、乾杯ね」二人は、風呂から上がり、ユリは美緒のパジャマを着ようとしたが、15センチほどの身長差があるため、全くサイズが合わず着ることができなかった。ユリは、着るものがなく、嘆き始めた。「あ～～、どうすりゃいいのよ。下着だけで、ビール飲めっていうの」美緒が、浴衣を出してきた。「これも小さいけど、下着よりましじゃない」ユリは、しかめ面で浴衣を着た。

美緒は、フレッジから350mlの缶ビールを取り出し、ユリに手渡した。「あては、ノリチーズでいい。あ、チクワもあった」二人がプルを引くと美緒が乾杯の音頭を取った。「さあ、乾杯よ。ユリの恋愛成就のために、カンパニー」喉が渇いていたユリは、グイグイと喉を鳴らしながら流し込んだ。ビールを半分ほど飲んだ美緒は、サイドボードからウイスキー BOWMORE を取り出し、グラスを2個並べた。「ユリ、氷なしでもいい？」ユリが即座に返事した。「なくていい。少し、薄めに作って。いつも、チューハイみたいに飲んでるから」グラスに炭酸水をゆっくり注ぎ終わるとユリにグラスを差し出した。ユリは、缶ビールを飲み干すと即座にグラスを手にした。

7

ユリは、ビールのようにハイボールをグイグイと喉を鳴らしながら、流し込んだ。少し陽気になったユリが歓声を上げた。「あ～～、旨い。ビールも、ハイボールも、なんてうまいんだろ～。あ～～、天国。お酒があれば、何にもいらない。生まれてきてよかった。美緒も、お酒、好きでしょ」美緒もお酒は好きだったが、ユリの飲みっぷりには、圧倒されてしまった。ユリは、酒豪で、毎日飲んでるように思えた。「ユリは、酒豪ね。でも、誘惑するときは、本当に酔っぱらっちゃだめよ。醜態を見せたら、嫌われるからね。そこそこに飲んで、酔っぱらったふりをするのよ。そして、何気なく、介抱してもらおう

の。その時、男性は胸を触るから。そうすれば、しめたものよ。要は、狩りしやすい獲物になってあげるのよ。そこが、ポイント」

美緒の言葉に一瞬酔いがさめた。ユリは、感心した表情で頷いた。「なるほど。さすが、美緒の言葉には、説得力がある。ユリは、ライオンに食べられる獲物になるということね。そのためのテクニックをこれから身に着けるわけか。わかったわ。美緒は、監督。ピシバシ特訓して。きっと、エロ美人に変身して見せる」美緒は、やる気の出たユリをほめると同時に、焦らないように注意した。「美緒に任せて。きっと、エロ美人に変身させてみせる。でも、焦っちゃダメ、先輩の時もそうだったけど、根気よく、自然な演技を見につけるの。何事にも、時間がかかるってわけ。リラックスが大事。すべてを美緒に任せて、心を投げだすの。そうすれば、本来持ってる女性の色気が出てくるから」ユリは、マジになって聞き入っていた。そして、大きくうなずいた。

ユリは、美緒の女性として成熟した一面に驚嘆し、驚きを口にした。「すごい。経験豊富なのは、よくわかったけど、美緒って、男性的なリーダーシップも持っているのね。ユリには、ないのよ。そういう、たくましさとか、行動力が。でも、それはムリでも、男性が、飛びついてくるような、女性になりたい。どうして男性が寄ってこないんだろう。顔かな～？ 体型？ 態度？要は、女性としての魅力がないってことよね。対馬のド田舎育ちだもんあ～。おしゃれも知らないし。あ～～、ヤッパ、田舎に帰って、お見合いをしたほうがいいのかも」美緒は、ユリの性格は4年間の付き合いでかなり知っていると思ったが、家族に関する事は母親のことぐらいしか、知らなかった。話の流れに乗って、家族について聞いてみることにした。

薄めに作っていたためか、ユリはハイボールをすでに飲み干していた。ユリのグラスを手にとると BOWMORE を注いだ。2 個目のハイボールを作り終わるとユリに手渡した。「薄めに作っているから、余り酔わないと思うけど、飲みすぎないようにね。ところで、対馬って、まだ行ったことがないんだけど、お魚がおいしいのよね。お父さんは、漁師さん？」ユリは、一瞬、厳原港（いづはらこう）に入港するフェリーを思い出した。「え、お父さんは、食品加工工場で働いてる。お母さんは、総合病院の看護師。妹と弟がいるんだけど、妹はスポーツ特待生で入った F 大で、バスケに明け暮れてる。弟は、高3の受験生。お母さんは、早く対馬に戻ってきて、対馬の病院で働きなさいっていうの。でも、ほんと、何にもないド田舎なのよね～～」

安部医科大学看護学科は、他の大学の授業料に比べて割高だった。だから、どちらかと言うと、経済的に恵まれてる家庭の学生が多いように思えた。しかも、ほとんどの学生は、学生寮から通っている。特待生になれなかったら、美緒が通えるような大学では

なかった。そもそも、美緒は、安部医科大学看護学科を希望していたわけではなかった。父親が安部医科大学付属病院で入院中に植物人間になり、死亡後、病院側から研究のための実験利用に父親を提供してほしいとの依頼があった。その交換条件が安部医科大学看護学科への特待生入学だった。F大学が不合格であったため、成り行き任せに病院側の依頼に従ったのであった。このことは、誰にも話していなかった。当然、ユリにも、話していなかった。

今ここで恋愛特訓をやっていたら、対馬での恋愛に役立つと思った。「いずれ、対馬に帰るのね。ここで、恋愛特訓やってれば、対馬で若い研修医をゲットできるかもよ。美緒に任せて」よいしょされたユリは、笑顔を作ったが、突然、ちょっとマジな顔つきになり、質問した。「話は変わるけど。ちょっと、疑問に思ってることがあるのよ。気を悪くしないでよ。安部医科大学の学生って、私立の偏差値の高い名門高校出身の学生が多いじゃない。鳥羽君って、高校はどこ？」美緒は、ユリの言いたいことを察知したが、平然と返事した。「鳥羽君は、ド田舎にある美緒でも入れる程度の糸島高校。びっくりしたでしょ。鳥羽君は、姫島の天才、って言われてたの。姫島出身なの」

8

鳥羽は、天才だとわかったが、私立の医科大学に入学したことに疑問がわいた。「天才なんですよ。だったら、国立に行けば良かったんじゃない」美緒は、鳥羽については、天才で姫島出身だということ以外あまり知らなかったが、鳥羽から聞いた話を話すことにした。「あまり詳しいことは、よくわからないんだけど、鳥羽君が言うには、安部医科大学の安部教授のスカウトで入学したんだって。だから、授業料は無料と言ってた。それと、鳥羽君は、父子家庭で、お父さんは、漁師だったんだけど、中学3年生の時に、海難事故で亡くなられたみたい。お金持ちのお坊ちゃん、じゃないことは確か」

ユリは、悲しそうな顔つきで首をかしげた。「そうなの。漁師の子供で、天才か。お父さんが無くなられた後は、親戚に引き取られたの？」美緒は、思い出しながら返事した。「はっきりとは、わからないんだけど、中学の担任の先生の家の下宿させてもらって、高校に通っていたみたい」ユリは、医学生は、みんな裕福な家庭のボンボンだと思っていたが、信じがたい不遇の天才鳥羽に憐れみを感じた。「対馬は、離島といっても、人口は約3万人はいるじゃない。姫島って、何人いるの？1000人ぐらいはいるの？高校はないよね」美緒は、鳥羽の話を出した。「島民全部で、200人ぐらいて、言ってた。小中学生は、15人ぐらいたって。高校はないから、高校に進学する子は、糸島市か、福岡市の高校に進学するんだって」



ユリは、対馬を離れ孤島で、詰まんないところだといつも思っていたが、姫島と比較すれば、かなり恵まれた島だと思えた。対馬には、高校が3つある。対馬やまねこ空港もあり、毎年、多くの観光客がやってくる。それと比べて、姫島には一つも高校がない。また、観光地として有名でもない。「対馬は、ド田舎って思っていたけど、姫島に比べたら、結構ましなのね。鳥羽君って、そんな、さみしい島で育ったのか。なんだか、21世紀の奇跡の天才って感じね」ユリは、話し込んでいるうちにグラスをからにしていた。「鳥羽君の話をしてると、なんだか、酔いがさめちゃった。もう一杯飲もうかしら」美緒も、酔いがさめていた。「そいじゃ、もう一杯、作るね」

美緒は、恋愛特訓の成果を示すために、ゆう子のお話を始めた。「さっき話したゆう子先輩なんだけど、来年の春に結婚するんだって。これって、特訓の成果よ。でも、そこにたどり着くまでは、根気良く、何度も、特訓やったのよ。人って、自信がついても、しばらくしたら、自信無くすじゃない」ユリは、ゆう子について尋ねた。「ゆう子先輩って、何やってるの？」美緒は即座に返事した。「先輩は、糸島中学の英語の先生。結婚相手は、体育の先生で、野球部の監督だって。先輩って、野球に縁があるのよ」ユリは、縁と聞いて興味がわいてしまった。「野球と縁がるって、ホークスの熱狂的ファンなの？」美緒は、ゆう子の過去を話すべきか迷った。「そうね、何というか、先輩の幼馴染が野球をやっていたってこと」

ユリは、即座に問い返した。「ということは、その結婚相手というのが、幼馴染ってこと？」美緒は、野球と縁があると言わなければよかったと後悔した。ゆう子の悲しい過去を話していいものか迷った。「それが、違うのよ。先輩には、いろいろとあってね」好奇心の強いユリは、ますます、ゆう子のことを知りたくなった。「いろいろって？」美緒は、言葉に詰まった。幼馴染の悲しい話をすれば、気分が落ち込んでしまう。ちょっと迷った挙句、簡単に話すことにした。「ちょっと、悲しい話なの。先輩の幼馴染は、高校2年生の時に、病気でなくなったの。そいで、先輩は、落ち込んだじゃって、かわいそうで、美緒が励ましたってわけ」ユリは、顔をしかめた。悪いことを聞いてしまったようで気まぐしくなった。「そうなの、ゆう子さん、かなり落ち込んだでしょうね。なんだか、悲しい話が続いて、さみしくなっちゃった」

悲しい話が続き、恋愛特訓の気合が薄らいでしまった。美緒はつぶやいた。「特訓の乾杯だったけど、悲しい話ばかりで、酔いがさめちゃったね。恋愛特訓は、またの機会にする？」ユリも恋愛特訓の気分ではなかった。ゆう子の悲しい話を聞いていると自分のパパ活が贅沢のように思えた。恋愛もせず、失恋もせず、気まぐれで、パパ活をやるとする自分が情けなくなった。パパ活はやりたかったが、やはり、恋愛をすべきではないかと思えた。特訓をやったら、まず、マジ恋愛をして、失恋してから、パパ活をやればいい。恵まれた家庭で育ち、周りからは秀才と言われ、看護学科を首席で卒業し

たユリは、特に挫折に苦しんだ経験がなかった。幼馴染を無くしたゆう子は、大きな悲しみを乗り越えたに違いないと思うと、ユリは、自分にも試練を与えなければと思った。

9

ユリは、明るい話をしたくなった。ゆう子の結婚の話を思い出して、結婚の話で盛り上がることにした。「そう、ゆう子さんは、来春、結婚なされるのよね。結婚か、あこがれるのよね。できれば、26で結婚して、子供は、3人以上は産みたいな〜。美緒は、どう、鳥羽君と結婚するの?」美緒は、結婚の話を振られて、面食らってしまった。資金力で彼氏にすることができたが、結婚できるかどうかは、全く予想ができなかった。「結婚? 鳥羽君と。まだ、そんな関係じゃないし。付き合っただけで、結婚の話は、一度もしたことないし。鳥羽君の気持ち次第、って感じ。いつも、運任せだから」ユリは、納得した顔で頷いた。

美緒は、鳥羽との結婚よりもゆう子のワクチン事件のほうが気になっていた。それは、教師によるワクチン接種推奨を反対するゆう子、と教師一丸となってワクチン接種を推奨するよう指示する校長との対立だった。ゆう子は、頑として校長の意見に反対するならば、姫島に転勤させられそうな状況に陥っていた。万が一、ゆう子が姫島に飛ばされたならば、結婚はどうなるのだろうか心配していた。結婚相手に理解があれば、問題ないとは思ったが、やはり心配であった。ユリは、うらやましそうに返事した。「彼氏がいるって、余裕ね。結婚は、運か?確かに、言える。出会いがあって、運命的に結ばれるのよ。あ〜、ドラマチック。ユリの王子様、早く出会いたいわ〜」

美緒は、あきれてしまった。少女漫画のような空想に浸っているユリの幸せそうな表情を見ると如何に男を知らないかを実感した。でも、気分を害さないようにいしよしながら、ゆう子の問題を話すことにした。「そうね、出会いね。きっと、ユリにも、電撃的な出会いがあると思うよ。そう、ゆう子先輩の結婚のことは、喜ばしいことなんだけど、ちょっと、気になることがあるのよ」ユリは、身を乗り出し、目を丸くして尋ねた。「え、もしかして、彼氏の元カノが現れたとか?三角関係は、厄介よね」スキャンダルをゲットしたかのようなユリのドヤ顔を見ると美緒は嘖き出しそうになった。笑いを抑えた美緒は、深刻な問題を話し始めた。「まったく、芸能人じゃあるまいし。そういうことじゃなくて、かなり、ヤバいことなの。校長とケンカしたのよ。ワクチン接種推奨のことで」

看護師のユリは、ワクチン接種において、数々の副反応と死亡例を確認していた。ユリは、ワクチン接種反対派だった。「校長とケンカ。ということは、ゆう子さんは、ワク

チン反対派、ってことね」美緒は、大きくうなずいた。「このままだと、校長と大ゲンカになって、姫島勤務になるかもしれないの。もし、そうなったら、結婚、どうなるんだろうって、心配なの」ユリも眉間にしわを寄せマジに返事した。「確かに、これは天下の一大事よ。本来、ワクチン接種は、本人の意思によるものだから、強制されるものではないけど、中学生であれば、先生が推奨すれば、ワクチン接種を強制されているような気持ちになると思うの。ゆう子さんは、先生たちは、生徒たちに推奨すべきではない、と校長に直談判してるんでしょ」

美緒は、さすが秀才のユリだと感心した。「きっと、その通りだと思う。詳しいことはよくわからないんだけど、ゆう子先輩は、ワクチン接種にすごく反対してるの。副反応が多く出ているし、外国では多くの死亡例もあるから。美緒もどちらかと言うと、ワクチンには反対なんだけど、美緒は、教師じゃないから、ゆう子先輩の力になってあげられないし。ゆう子先輩は、正義感が強く、根がまじめで、しかも、岩のように頑固なの。原発再稼働反対のデモにも参加して、大きな声で、「反対反対」って叫んでいたんだから。きっと、転勤程度の脅しでは、絶対、屈しないと思う。このままいけば、姫島に飛ばされると思う」ユリは、腕組みをして目を輝かせた。「やるわね～～、ゆう子さん。胆が据わってる。でも、相手が校長じゃ」

ゆう子の問題について、余りにもマジになったユリの態度を見ていると相談すべきではなかったと後悔したが、自分だけで悩むことに限界が来ていた。誰かに相談して、気分を楽にしたかった。「こんなこと、ユリに話したりして、ごめん。美緒には、どうにもできなくて、気がめいていたの。ユリには、関係ないから、マジにならないで」ユリは、大きく顔を左右に振った。「何、言ってるのよ。ワクチン接種問題は、看護師の問題でもあるのよ。学校だけの問題じゃない。日本国民全員の問題よ。看護師がやれることは、協力しなくっちゃ。ゆう子さんは、教師としての将来をかけて、校長と闘ってるのよ。放っておけるわけじゃないじゃない。私たちは、看護師よ。医療のプロなのよ。ゆう子さんを支援しなくっちゃ」

10

## テロ

9月2日（金）糸島中学の梅田校長が合同朝礼時において殺害された。午前8時46分、ドローンが梅田校長の頸部に墜落し、激突の瞬間に爆発が起きた。それにより、梅田校長の頸部は、破壊され、それによる出血多量で死亡に至った。このニュースを知った美緒は、驚きと同時に、一瞬、笑顔を作った。というのは、殺害に対して不謹慎だと思ったが、ゆう子にとっては、幸運が舞い込んだと思ったからだ。校長がいなくなれば、ゆ

う子は姫島に飛ばされなくて済むのではないかと期待した。この事件に関して、中学校では、てんやわんやになっているに違いないと思い、しばらく事件後の経過を傍観することにした。でも、一抹の不安はあった。それは、ゆう子が、校長と対立していたため、犯人の一味ではないかと刑事たちに疑われているのではないかということだった。

事件後、数日間にわたって、先生たち全員事情聴取を受けたが、校長と対立していたゆう子は、長時間の取り調べを受けた。刑事たちは、頭から、ゆう子は殺害グループの一味ではないかと疑っていた。というのは、教職員の中で、ワクチン接種推進に反対していたのは、ゆう子だけであったからだ。また、教職員会議においても、ゆう子は、校長と激しい口論を繰り返していた。そのことは他の教職員らから聴取済みだった。9月10日（土）被疑者扱いを受けていたゆう子は、糸島警察署に呼び出された。午後1時半から、取調室で小太りの刑事から尋問を受けることになった。取り調べの理不尽さに怒り心頭だったが、不利になるような返答をしないようにグッと怒りを抑えた。

取調室に案内されたゆう子は、まな板の上の鯉の心境で心静かに担当刑事を待った。伊達は、ドアを2度ノックし、ドアを静かに開けた。伊達は、相手が美人で雄弁な英語の先生ということで緊張していた。伊達は、ゆう子の正面に腰掛けると軽く咳払いをした。「それでは、取り調べを行います」ゆう子は、しかめっ面で小さく返事した。「はい。これ以上、話すことはないと思いますが」伊達は、先制パンチを食らい一瞬、身を引いたが、尋問を始めた。「早速ですが、事件があった日の8時46分、教頭の頭上のドローンに気づかれましたか？」今年に入り、体育の時間に、貧血を起こし突然倒れる生徒たちが増えていた。特に、ワクチン接種を受けた生徒たちに起きていた。そのため、グラウンドでの全体合同朝礼では、全員体育座りで整列していた。先生たちは、生徒たちの最後尾に立ち、生徒たちの動きを監視していた。

ゆう子は、生徒たちに目をやっていたため、ドローンには気づかなかった。「全く、気づきませんでした。これって、最初の尋問で、お答えしましたよね」刑事は同じことを聞くことが多く、それは、返答の仕方で本当のことを言っているかどうか判断していた。「まあ、そう、ムキにならずに。他の先生たちも、お気づきではありませんでした。今回の殺害事件は、当然計画的なものです。犯人は、9月2日、金曜日に、臨時合同朝礼があることを知っていたことになります。また、その日に合わせて、ドローン爆弾を使って殺害する準備を行っていたと考えられます。我々としては、今回の事件は、反ワクチン派のテロと考えています」

ゆう子は、苦虫をつぶしたような表情で聞き入っていた。ゆう子がテログループの一味だと言わんばかりの口調に怒りが込み上げてきたが、心証を悪くしないように、冷静

に聞くことにした。伊達は話を続けた。「と言いますのも、現在のところ、メディアで公開なされてはいませんが、全国各地で、ワクチン推進派代議士への脅迫状が、何者かによって送り付けられているのです。今回の殺害事件の一味と脅迫状を送り付けた一味が、同じだとは言えませんが、テロ一味の仕業とは推測できます。メディアからの情報ですが、参政党支持者の中には、反ワクチン派が数多くいることが知られています。大島先生は、参政党支持者でしょうか?」

ゆう子は、とんでもない話の展開にこめかみに青筋を立てた。恰も、テロ一味は、参政党支持者と言わんばかりの言い回しに反論した。「それは、かなりの偏見じゃないですか?私も参政党を支持しています。参政党支持者に反ワクチン派は多いですよ。だからと言って、参政党支持者がテロをやっていると考えるのは、全くお門違いだと思います。そう考えるより、むしろ、参政党つぶしをやっている工作人員の存在を考えるべきです。参政党とテロを結び付けるように工作している一味がいると考える方が筋が通ります。神に誓って、宣誓します。犯人は、私ではありません」

11

伊達は、ゆう子の色気に脳が麻痺し始めていたが、気を引き締めて工作人員の目論見を話し始めた。「先生のおっしゃることには、一理あります。しかしながら、参政党支持者の中にテロ一味が潜んでいるというタレコミがあったのです。おそらく、参政党支持者の中にスタッフが紛れ込んでいるのじゃないかと。そうなると、かなり厄介な事件になります。万が一、参政党支持者の中にテロ集団がいたとして、彼らを逮捕するようなことになれば、参政党はテロ集団とみなされてしまい、参政党は崩壊するでしょう。この筋書きにならないことを祈っていますが、この可能性は高いのではないかと考えています」ゆう子も参政党内部にテロ集団が潜んでいるかもしれないと直感した。組織の破壊には、外部からより、内部からのほうが効果がある。アメリカ崩壊も、この手口が使われた。

ゆう子は、一刻も早く、閉塞感を感じるこの部屋から脱出したかった。ゆう子は、身を乗り出して尋ねた。「まだ何か?」伊達は、色っぽい顔を近づけられ、一瞬、フラフラとしてしまった。「いや、まあ、もう少し、お時間をいただきたい。今回の事件の手掛かりは、ドローンしかありません。ドローンを所持している先生はご存知ですか?所持していなくても、ドローンに関心がある先生でもいいんです。どなたか心当たりは、ありませんか?」ゆう子は、心当たりがあったが、告知すべきか迷った。告知された先生は、全く事件と関係ない人物だとしても、疑われることになる。「ドローンですか。全く知りません。刑事さんたちが、調べられたらどうです?」

伊達もこれ以上の尋問は、人権侵害になるようで、尋問を打ち切ることにした。「先生を疑うような尋問でしたが、当方といたしましては、情報が欲しいわけです。今のところ、解決の手掛かりが、一つもないのです。各地で起きている議員への脅迫状からも、手掛かりがつかめていません。今後、どんな些細なことでもいいのです、何か事件に関する情報を入手されたら、是非、お知らせいただきたい。ご協力、ありがとうございます」ほんの少し笑顔を作った伊達は、ドアを開けると丁寧に退出を促した。ゆう子は、白のロードスターに乗り込み、静かにアクセルを踏んだ。伊達は、ロードスターを眺め、つぶやいた。「絵になるよな～～、美人に、ロードスター」

9月12日（月）午後5時過ぎに、ゆう子は梅沢教頭をともなって糸島警察署にやってきた。伊達は、早速、取調室に案内した。梅沢教頭の顔は、青ざめ、手は小刻みに震えていた。ゆう子は、梅沢教頭の横に立ち、不安げな顔で伊達に事情を話した。「教頭に、脅迫状が届いたんです。これを見てください」ゆう子は、B4の大きさの広告用紙を裏返し、伊達の目の前に差し出した。手に取った伊達は、そこに記された文字を読み上げた。「交通事故にご用心！！」伊達は、驚く様子もなく、頷いた。「なんとなく、脅しにも見えますが、いたずらってことも考えられますね」梅沢教頭は、身を乗り出して応答した。「いたずらじゃないですよ。校長は、ドローン爆弾でやられたんですよ。次は、教頭だ、って脅迫してるんですよ。どうすればいいんですか?」

確かに、校長殺害の直後とあって、いたずらでは片付けられなかった。「このような脅迫状は、初めてですか?」梅沢教頭は、大きく頷き、返事した。「はい、初めてです。きっと、今度は、私の番に違いない。私を、守ってくれますよね」伊達は、返事に困った。警察は、交通事故から守ることはできない。本人に気を付けてもらう以外ない。「とにかく、落ち着いてください。この文言からすれば、殺害予告ではありません。そう、心配なされることはないと思いますが」悲壮な顔つきの梅沢教頭は、ゆう子に助けを求めるように、ゆう子の手を握りしめた。「ゆう子先生、これは、殺害予告ですよ?きっと、私は、狙われている。次に殺されるのは、私です。そう思うでしょ、ゆう子先生」

ゆう子も梅沢教頭と同じ心境だった。梅沢教頭は、校長に気に入られようとワクチン接種推進に熱心だった。今年に入り、朝のホームルームを巡回しては、ワクチン接種を推奨していた。ゆう子は、梅沢教頭の手をしっかりと握り返し、励ました。「大丈夫です。私たちが守りますから。安心してください」伊達は、この文面では、脅迫状に値しないと判断していた。「とにかく、落ち着いて。この文言だけでは、脅迫とは断定できません。今後、何らかの殺害予告めいた脅迫状が送られてきたならば、警察も動くことができますが、今の段階では」実のところ、ゆう子も半信半疑だった。生徒のいたずらの可能性も考えていた。ワクチン接種推奨を部活顧問の先生たちにまでも指示していた梅沢教頭は、生徒たちに嫌われていたからだ。

この文言だけでは必ずしも脅迫とは言えないと判断したゆう子は、梅沢教頭を慰めることにした。「大丈夫です。私たちがお守りします。はっきりとした脅迫ではありません。とにかく、用心深く生活していれば、大丈夫ですよ。特に、運転には十分気を付けて」少しは、落ち着きを取り戻した梅沢教頭は、小さくうなずき、返事した。「わかりました。車の運転には、十分気をつけます。ワクチン接種推奨なんか、やらなければよかったです。そうだ、今日から、ワクチン反対派になる。ゆう子先生の仲間になります。ゆう子先生、参政党に入れてください。いいですよ」ゆう子は、梅沢教頭の心変わりを大いに歓迎した。「それは、大歓迎です。職員会議でも、はっきりとワクチン接種反対を宣言してください。そうすれば、先生方も、ワクチン接種に反対されると思います。」

青ざめた顔は、すっかり消え去り、梅沢教頭は、晴れ晴れとした笑顔で話し始めた。「ゆう子先生が、そう言ってくれるなら、テロなんかこわくない。ゆう子先生、一緒に、ワクチン反対運動、やらせてください」梅沢教頭は、ゆう子の手を改めてしっかり握りしめるとゆう子も握り返した。伊達は、梅沢教頭の不安が払拭され一安心した。ワクチン反対派になったからと言って、殺害テロが消え去ったと言い切れなかったが、伊達は、この場においては、梅沢教頭を安心させることにした。「梅沢教頭がワクチン接種反対を教職員会議で宣言されたなら、全生徒にも伝わり、テロ集団にも伝わることでしょう。でも、車の運転は、十分用心してください」

梅沢教頭が落ち着きを取り戻したところでドローンについて尋ねることにした。「ところで、先生方の中で、ドローンを所持しているいらっしゃる方は、いらっしゃいますか？」梅沢教頭は、首をかしげて黙り込んだ。しばらくすると、梅沢教頭は、ちょっと気まずそうな顔つきで話し始めた。「実を言いますと、私はドローンを持っています。でも、私は、犯人ではありません。信じてください。それと、先生の中に、ドローン仲間がいます」伊達は、身を乗り出して尋ねた。「その先生は？」ちょっと口ごもった梅沢教頭は、ゆう子の顔を覗き見た。ゆう子の顔は、一瞬引きつった。梅沢教頭は、ゆっくりつぶやいた。「大野先生です。彼も犯人じゃない。とても誠実な先生です」

伊達は、ドローンに関する初めての情報に心が弾んだ。教師の中に犯人がいるとは思わなかったが、手掛かりをつかむことができ目の方が明るくなった。「ということは、梅沢教頭と大野先生は、ドローンを所有しているわけですね。当然、お二人には、ドローン仲間がいらっしゃるわけですね。となれば、お二人の口から、学校の情報が漏れたとも考えられます」梅沢教頭は、自己弁護を始めた。「ちょっと、そういう言い方をされ

ると我々が、テログループの一味のように聞こえますよ。神に誓って、私も、大野先生も、テログループの一味じゃありません。そもそも、ドローンに所有している人は、生徒の中にもいるし、その家族にもいるでしょう。さらに、全国にはたくさんいるでしょう。ドローンだけで犯人を特定するのは、ムリ筋ですよ」

当然、伊達は、ドローンに所有しているだけで犯人を特定しようとは思っていなかった。殺害の武器として使用されたドローンに関する情報を可能な限り集めていた。というのも、今のところ、解決の糸口が、ドローン以外なかったからだ。二人が所属しているドローンクラブから、何らかの手掛かりを得ることができればとかすかな期待を持っていた。「梅沢教頭のおっしゃる通りです。あくまでも、ドローンは、手掛かりの一つでしかありません。残念ながら、ドローンに関して、犯人を割り出せるような手掛かりが全くつかめないのです。警察も焦っているのです。梅沢教頭にも、ご協力いただくと大変助かります」

腕組みをした梅沢教頭は大きくなずいた。「そうですか。ドローンを使った殺害です。実に、巧妙な手口です。現在のところ、ドローンの操縦には、国家資格は必要ありません。誰でも、操縦できます。もしかすると、プロスナイパーのように、お金で雇われたプロドローン操縦士かもしれませんね。そうであれば、ますます、捜査は困難になりますな」伊達は、梅沢教頭の話聞くにつれて憂鬱になってきた。テログループであれば、資金を提供する人物、リーダーとメンバー、テログループから依頼されたプロの殺し屋、などかなり大掛かりな組織が考えられる。また、資金を提供している人物は、日本人とは限らない。考えれば、考えるほど、気がめいつてきた。

13

ガシガシと頭をかいた伊達は、大きなため息をついた。その時、追い打ちをかけるように当初からの疑問が吹き上がった。それは、なぜ、片田舎の校長が殺害されたかだ。ワクチン接種推奨に力を入れている大学、高校、中学は、全国にたくさんある。常識的に考えれば、テログループは大都会の有名な学校を狙うのではないかな?なぜ、片田舎の校長を狙ったのか? 殺害の対象は誰でもよかったのか?いや、そうとは考えにくい。梅田校長の殺害には、何らかの理由があると考えべき。いやいや、それとも、殺害をテロと考えたことに誤りがあるのか?殺害された梅田校長について、もっと詳しく調査する必要がある。何か、隠された秘密があるのでは?

伊達は、梅沢教頭に梅田校長について質問した。「校長は、特に、誰かに、恨まれているということはありませんか?」梅沢教頭は、即座に返事した。「それは、たくさんいる



でしょう。なんせ、暴君でしたから。自分の言いなりにならない先生は、ことごとく左遷していましたから。そう、ゆう子先生も、姫島に飛ばされるどころでした。そうですよね、ゆう子先生」ゆう子は、顔をしかめて返事した。「まあ、校長には、そのように、ほのめかされていました。私は、ワクチン接種推奨に反対してましたから」伊達は、多くの先生に憎まれてるとしても、先生が犯人とは思えなかった。何か、校長に関する事件はなかったのだろうか？

伊達は梅沢教頭にさらに尋ねた。「ワクチン接種で生徒が死亡したということはありませんか？」梅沢教頭は、即座に首を振った。「いいえ、当校では一人もいません。副反応で熱を出した生徒は結構いましたが。でも、前の学校では、一人亡くなったと聞いてます」伊達は、身を乗り出した。「前の学校とは、どこの学校ですか？」梅沢教頭は、ちょっと間を取ったが、返事した。「東京のS中学です。でも、生徒の突然死において、ワクチン接種との因果関係は不明ということでした」ワクチン死亡は参考になる事件だとは思えたが、もっと何か強い殺人動機があるように思えてならなかった。「そうですか。そのほかに、何かご存知ないですか？」

梅田校長とのかかわりは、昨年からだだった。そのため、校長に関しては、ワクチン接種死亡事件以外何も情報を持っていなかった。梅沢教頭は、頭をかきながら返事した。「いいえ、校長とおつきあいは、一年ちょっとですから。ほかには」梅田校長の過去に何かがあると推測した伊達は、隠された秘密を調査することにした。「お二人のご協力に、感謝いたします。大変助かりました。今後も、どんな些細なことでも構いません、なにか情報がありましたら、提供いただけますか。くれぐれも、お車の運転には、ご注意なされて、お帰りください」梅沢教頭は、笑顔を作り、ゆう子の手を握りしめた。ゆう子も笑顔を返した。それを見た伊達は、大きな咳払いをし、二人をにらみつけた。「もう手を握らなくていいんです。先生も、なに握り返してるんですか？ここは警察署です。不謹慎、極まりない。手を離さない」

注意された二人は、目を丸くして、手を引っ込めた。伊達は、二人を玄関まで送った。駐車場には、新車と思われる青の特斯拉・モデル3が止まっていた。二人が乗り込んだ特斯拉・モデル3は、静かに消えていった。伊達は、約700万はする高級車に乗れる教頭がうらやましかった。いつかは、EVに乗りたいとは思ったが、夢に終わると思えた。その時、ふと、特斯拉の自動運転事故が頭に浮かぶと、不吉な予感がした。まさかサイバー攻撃？考えすぎだと顔をブルブルと振った。デスクに戻った伊達は、お茶をすすり一息ついた。梅田校長頸部へのドローンの直撃を思い浮かべた時、死亡診断書を思い出した。左頸動脈破裂による出血死。もし、頸部でなく頭上で爆破していたなら、助かっていた可能性はある。運が悪かったのか？

ここ数日、伊達は熟睡できなかった。ドローン爆弾殺害事件の解決糸口が全く見えなかったからだ。もはや、完全なあきらめモードだった。たとえ、自責の念に駆られて、ドローン爆弾殺害グループの一人が、自首してきたとしても、自白だけで、その人物を有罪にすることはできない。殺害に使ったものと同じドローンと爆弾を所持していたとしても、それが物的証拠となりえない。また、その人物がドローン操作をしている現場を第三者に目撃されていたとしても、操作していたドローンが殺害に使われたドローンであると断定することはできない。

14

### 自首

9月26日(月)午前10時過ぎ、糸島警察署の駐車場に赤のオーディ TT クーペが入庫してきた。ブルーのジャケットを着た初老の男は、辺りをキョロキョロと見渡すと玄関に向かってゆっくりと歩いて行った。金縁の眼鏡をかけた少し浅黒い男は、玄関の自動ドアが開くと静かに足を踏み入れた。彼がカウンターの前に立つと受付の男性が即座に対応した。受付は尋ねた。「免許の更新ですか?そちらで受付を行ってください」男は、顔を左右にゆっくり振った。「免許の更新ではありません。私は、竹中と申します。刑事さんにお話があります。取り次いでいただけませんか?」受付は、目を丸くした。「え、刑事ですか?伊達刑事でしょうか?」気まずそうな表情の男性は、返事した。「はあ～、今、いらっしゃる刑事さんで結構です。お願いします」

受付は、首をかしげて伊達に取り次いだ。伊達も首をかしげて返事した。「竹中? 誰だ?知らね～な」伊達は、カウンターに向かった。見知らぬ顔を目にした伊達は、対応した。「俺が、伊達だが。なにか?」竹中は、小さな声で話しかけた。「校長に関する事で、お話が」伊達は、校長と言えば、ドローン爆弾で殺害された校長だと察した。「え、あの事件の?」竹中は、頷いた。八方ふさがりで藁をもつかむ思っていた伊達は、ここ数日間、頭を抱えていた。この男は、事件解決の糸口となる情報を持ってきたのではないかと思い、一瞬笑顔を作ってしまった。「そうか。こっちに来てくれ」伊達は、竹中を取調室に案内した。

取調室で向かい合った伊達は、相手を落ち着かせるために性急に問い詰めないことにした。「校長についてと言われたが、あなたは、どのような関係でいらっしゃるんですか?」竹中は、自白を決意していたが、いざとなると、躊躇していた。竹中の自主は、自責の念からであった。というのは、結果的には、梅田校長は死に至ったが、テログループも竹中も、殺害の意図はなかった。突風による操作ミスだったとはいえ、殺害したこと

は重罪だと考えた竹中は、自分に厳罰を与えたかった。もしここで、自白すれば、当然、テログループについての尋問がなされることになるが、テログループについては、口が裂けても話すつもりはなかった。

竹中は、しばらく黙り込んだ。伊達は、少し不安になった。もしかいたら、この男は、警察をからかいに来たのではないか?もしくは、警察の動きを探りに来たのではないか?伊達は、イラ立ち始めた。「何か、お話があるんでしょ。校長のお友達なんですか?それとも、親戚の方ですか?」竹中は、伊達の顔を一瞬見つめたが、また、俯いてしまった。言葉を発しようとするやと突然恐怖が訪れ、口ごもっていた。自白すれば、仲間を裏切ることになる。当然、テログループに命が狙われる。それは、覚悟の上であった。竹中は、殺意はなかったとはいえ、殺害したことに対する正当な処罰を受けたかった。

竹中は、重たい口を開いた。「はい、校長とは、知り合いです。小中高と同じ学校に通ってました」と言い終えると「ハ〜〜」と大きなため息をついた。いたずらではないと思った伊達は、話を促した。「お友達を無くされたということですね。お気の毒です。犯人が、憎いでしょう」竹中は、またもや、「ハ〜〜」と大きなため息をついた。竹中は、親友を殺害してしまったことに、悔やんでも、悔やみきれなかった。一度は、自殺しようと考えた。しかし、それでは、罰が軽すぎるように思えてしまった。法的に裁かれ、厳罰を科され、まずは、死以上の苦しみを受けなければならないと思えた。

ただ、警察署にやって来たことを後悔していた。自宅に刑事を呼ぶか、どこかの公園で落ち合うべきだと悔やんだ。万が一、警察署に入るところを仲間の監視員に目撃されていたならば、今日中にも暗殺される可能性はある。しかし、今となっては、後には引けない状況に追い込んでいた。握りこぶしを作った竹中は、きっぱりと、自白し、刑罰を受ける覚悟を固めた。竹中は、顔を持ち上げ伊達をじっと見つめた。「親友を殺害したことをとても悔やんでいます。私に法的厳罰を与えてください」伊達は、突然の自白に身を引いてしまった。品のある風貌の男から発せられる言葉とは、信じ難かった。伊達は確認した。「おい、まさか、俺をからかっているんじゃないかな?マジなのか?」竹中は、大きくうなずいた。「神に誓って、嘘ではありません。私が殺害いたしました」

15

呆然となった伊達は、しばらく息が止まってしまった。窒息しそうになった伊達は、勢い良く息を吸い、「オ〜〜」と大きく息をはいた。男の言葉が、今でも信じられなかった。「殺害した?あんたがか?ということは、テログループの一員ということか?」竹中は、小さくうなずいた。「はい、リーダーの命令でやりました」伊達は、腕組みをして、顔を

左右に振った。「リーダーの命令でもって、親友を殺害したのか。冷酷なヤツだな」その言葉を聞いた竹中は、身を乗り出して返答した。「そういわれても、仕方ありませんね。でも、殺害する意図はなかったのです。リーダーの命令は、梅田校長の頭上でドローンを爆破させることでした。ターゲットが私の親友ということで、腕には自信があった私が、その役を引き受けました。あのとき、突風が吹かなければ、あんなことには」

伊達は、ちょっと首をかしげ、考えた。この話は、真実味がある。男の表情も演技ではなさそうに見える。しかも、あのときは、突風が吹いて、土煙が上がり、大島先生は、一瞬目を閉じたと言っていた。いや、いや、突風が吹いたことは、犯人じゃなくとも知りえることだ。待てよ、真犯人をかばっての身代わりということも考えられる。テログループの話も事実かどうか怪しい。しっかり、疑ってかかったほうが賢明だ。伊達は、慎重に事情聴取を始めた。「それでは、質問を始めますので、教えてください。まず、お名前、年齢、住所、電話番号、職業を聞かせてください」竹中は、質問に丁寧に答えたが、職業は答えなかった。

伊達は、再度質問した。「テログループの一員であっても、無職じゃないでしょ」竹中は、ぼそっと返事した。「フリーターです」伊達は、高級なジャケットを見て尋ねた。「どんなバイトをしてたんですか?やったことのあるアルバイト教えてください」竹中は、小さな声で返事した。「病院で、ちょっと」伊達は、具体的な仕事を聞いた。「病院の医療事務、ってやつですか?」竹中は、小さく顔を振った。「いいえ、診察です」伊達は、耳を疑った。診察ということは、医者。医者が、テロリスト。「え、ということは、あんたは、医者か?」

竹中は、頷いた。「はい」伊達は、信じられなかった。やはり、誰かをかばっているのではないかと疑った。「嘘を言っても、後でばれるぞ。本当のことを答えるように」

竹中は、肩を落とし精気を失った表情で返事した。「承知しています。一切、嘘は申しません。すべては、私が悪いのです。一刻も早く、最も重い刑罰をお与えください」苦虫をつぶしたような表情の伊達は、腕組みをして考え込んだ。自ら罪を認めたとしても、自白だけでは、有罪にはならない。この男の殺害を立証するのは、かなり難しい。ドローンは、爆発とともに木っ端みじんに破壊され、ドローンからは、指紋を採取できない。当然、犯人が手袋をしてドローンを取り扱ったならば、指紋の採取は期待できない。殺害に使われたドローンを誰が操作していたかを確認する方法が、全くない。この男が、どんなに詳しく殺害状況を供述しても証拠能力はかなり弱い。

何か手掛かりを掴むには、質問を続ける以外ないと判断した。「何時から、テログループの一員になったんだ?それと、メンバーになった経緯と加入動機は?」竹中は、即座に

返事した。「はい、2021年3月にメンバーになりました。ある方の勧誘ですが、その方の実名は告知できません。それに、グループに関しては、一切公言できません。それは、掟ですから。加入動機は、政府のワクチン接種推奨政策に反対だったからです」伊達は、その言葉から男はワクチン接種反対派だと認識した。「ということは、あんたは、ワクチン接種反対派だということだな。テログループも、ワクチン接種反対派なんだな」

竹中は、大きくうなずき返事した。「はい、政府も医師会も、私の意見を聞き入れてくれませんでした。私は、ワクチンを打つことができず、医者をやめる決意をしました。そんな時に、誘いがあったのです。テロは、正義に反するとは思いましたが、自分にできることは、これしかないと思ってしまいました。それで」伊達は、竹中の言い分を一応認めることにした。「そうか、あんたの家族構成は？」竹中は、小さな声で返事した。「いません」伊達は、問いかけた。「結婚歴なしということか？」竹中は、顔を小さく振った。「いいえ、妻と子供がいました。今はいません」

16

離婚したと思った伊達は、再度尋ねた。「つまり、離婚したってことだな」竹中は、即座に返事した。「いいえ、死別です」ちょっと気まづくなっただが、死別について尋ねた。「奥さんも子供も、病死ということですか？」竹中は、返事に困った様子を見せた。「病死ではありません。話さなければなりませんか？」なるべく具体的な供述は、本人のためになると思い、話を促した。「隠すことなく話したほうは、今後、あんたのためになる」竹中は、頷き話し始めた。「子供は、小学校5年生の時に、交通事故でなくなりました。妻は、それがもとで、半年後に気がふれて、自殺しました」

竹中の不幸話に気がめいてきたが、事件に関する質問に切り替えた。「ところで、臨時合同朝礼の日時をどうやって、知りえたんだ」ちょっと気まづそうな表情で返事した。「実は、梅沢教頭からです。いや、決して、教頭は、テログループの一員ではありません。Kドローンクラブの仲間なのです。決して、教頭を疑わないでください。会話の中で、偶然耳にただけですから。信じてください」伊達は、ちょっと厄介な人物がかかわってきたことに顔をしかめた。ガシガシと頭をかくと質問を続けた。「そう、今のマンションに引っ越してきたのは、何時からなんだ」竹中は即座に返事した。「今年の2月です。福岡でテロ活動をするためです。3月にKドローンクラブに加入し、その時以来、梅沢教頭とは、交流があります。あくまでも、ドローン仲間としての交流です」

伊達は、今回の梅田校長の殺害事件は、計画的であったと確信した。「聞くが、ドローン爆弾テロは、校長以外にも計画していたというんだな」竹中は、顔をしかめた。「はい、

でも、今回のテロ以外のテロ計画については、話すことができません。今回の梅田校長殺害は、神に誓って、私がやりました」伊達は、テログループについて聞き出したかったが、この調子では、口を割りそうになかった。竹中は、話の流れからして、テログループの一員であることは、確かなようであったが、全くの作り話と言えなくもない。医者ということは、かなりの秀才ということになる。となれば、自分を犯人と思わせるシナリオ通りに話を進めている可能性もある。

伊達は、安易にこの男の話信じるのは危険と感じた。「自分がやりましたと何度言っても、今の段階では、起訴できるかどうか危うい。共犯者がいたのか？」竹中は、顔を振った。「いいえ、私一人でやりました。マンションで送信機を操縦しました。殺害に使った送信機は、マンションにあります。疑われるなら、あのときの操縦を再現いたします」この男の話は、状況証拠とはなりえても、確固たる証拠は何一つなかった。次第に、イライラし始めた。「自分が殺害したといってるんだよな。何か、自分がやったと言える証拠はないのか？」竹中は、首をかしげた。「証拠ですか？殺害に使ったドローンと同じものを持っていますが。証拠になりますか？」

伊達は、この男がテログループの一員であれば、単独犯ではないと直感した。「あんたが、送信機を操縦したことはわかった。思うのだが、本当は、マンションに仲間がいて、窓からドローンを撮影していたんじゃないか？その録画を提出してもらえれば、即、起訴できるんだが。録画を隠しているだろ？」竹中は、即座に返事した。「マンションにいたのは、私だけです。嘘じゃありません」伊達は、必ず、あの時のドローンの録画があると思えたが、手に入れることができなければ、証拠とすることはできない。ほかに、何か決め手はないか考えたが、伊達の頭ではここまでだった。「決め手がないんだな。自分がやったといってるが、身代わりってことも考えられる。あんたは、俺より、何倍も頭がいい。まさか、不起訴を見込んで、自首してきたってことは、ないだろな？」

竹中は、目を丸くして返答した。「滅相もない。私は、親友を殺した極悪人です。これは、まぎれもない真実です。私は、最も重い刑を望んでいるんです。絞首刑にしてください。一時は、自殺も考えました。でも、自殺で償えるようなものではありません。法的な裁きを受け、厳罰を受けなければ、親友に、申し訳が立ちません。是非とも、絞首刑にしてください。お願いします」ここまで厳罰を求める犯人がいるだろうか？これも、演技なのかもしれない。気を緩めては、足元をすくわれる。「まあ、気持ちは分かった。だからだな～。窓から撮影したあの時の録画が欲しいんだ。全く、厄介な事件だ。ドローン兵器を作ったやつが、最もけしからん。ぼやいても、しょうがないけどな」

竹中は、苦虫をつぶしたような表情の伊達を見つめ、問いかけた。「私の自白だけでは、難しいですか?殺害に使った送信機を提出しても無理ですか?」伊達は、腕組みをして、しばらく黙っていた。竹中が、つぶやいた。「実を言いますと、録画はあります」伊達は、目を丸くして跳びあがった。「そうか、録画はどこだ。マンションか?」竹中は、頷いたが、気まずそうにつぶやいた。「でも、その動画というのは、窓から撮影した動画じゃありません。私が操縦しているあの時の動画です。証拠になりますか?」一瞬考えこんだが、口をとがらせ質問した。「その録画には、時刻が記載されてるよな。録画の時刻が、殺害時刻と重なってれば、証拠となりえなくもないが」

竹中は、首をかしげて質問した。「間違いなく、殺害時刻が録画に記録されています。何か、足りないものでも?」伊達は、まだ、不十分だと思えた。というのは、たとえ、殺害時刻に送信機を操縦していたからと言っても、操縦されているドローンが、殺害に使われたドローであると断定できないからだ。殺害に使われたドローンは、別室にいた仲間が操縦していたかもしれない。「まあ、状況証拠にはなるだろうが、その録画ぐらいじゃ、起訴は難しい。万が一、起訴して、公判中に、真犯人が現れんとも限らない。とにかく、決め手が欲しい」竹中は、身を乗り出して訴えた。「とにかく、起訴してください。心から、裁判官に、私がやりましたと訴えますから。裁判官もわかってくれると思います」

無罪を訴えるというのならよくあることだが、有罪を訴えるのは、そうあることじゃない。しかも、厳罰を望む犯人など、前代未聞だ。「おい、おい、気持ちはわかるが、起訴に必要な証拠が、完全にそろってない。そんなに起訴してほしかったら、窓から撮影した録画をもってこい。仲間が持ってるはずだ」竹中が、脅えた表情で叫んだ。「私を殺す気ですか?今、仲間と会えば、殺されるに決まっています。仲間は、私が警察に行ったことは、すでに、知っているはずです。裏切者は、即座に、消されます。刑事さんは、それを望まれているんですか?」伊達は、身を引いた。この男が、本当に、テログループの一員であれば、裏切り者として殺されるのは想定される。

身代わりで、もしくは何らかの目的で、自首してきたのならば、今までの話は、全て嘘ということになる。信じていいものか悩んだが、本当であれば、暗殺される可能性はある。「わかった。今の言葉は取り消してくれ。あんたを危険にさらすわけにはいかん。しばらく、身の安全を確保するために勾留することにする。いいな」竹中は、笑顔でうなずいた。「ありがとうございます。ここが一番安全ですから。今日から、ここに泊まれるんですね。お願いします」伊達は、頭をかきながら返事した。「まあ、身の安全が第一だからな。腹、へっただろう。外に出るのは、危険だから、何かとることにする。酢豚定食はどうだ?」竹中は、笑顔でうなずいた。

伊達は、これ以上の知恵が出ないと思い、沢富の力を借りることにした。「午後からは、博多署で、テロ対策をやっている刑事が尋問する。休憩だ」時刻は11時半を過ぎていた。伊達は、食事を終え、沢富がやってくるのを待った。竹中は、食事を終え、晴れ晴れとした表情で伊達に話しかけた。「博多署からいらっしゃる刑事さんも、わかってくれるといいんですが。自白もしてるし、録画の証拠があるし、大丈夫ですよ。起訴してくれますよね」伊達は、即座に返事した。「起訴するのは、検察官だ。俺たちは、検察官が起訴できるように証拠を集めるだけだ」伊達は、ますます不安になってきた。万が一、この事件を解決できなければ、左遷されるか、交通係に回されるように思えた。

この男の自白と状況証拠だけでは、起訴できない。決め手はないのか？伊達は何度も心で叫んだ。腕時計を見ると2時近くになっていた。駐車場にシルバーのスズキクロスビーが入ってきた。沢富は、車を降りると、駆け足で取調室に向かった。ドアを2回ノックすると中から返事があった。「入って、いいぞ」沢富は、静かにドアを開け、中を覗き込んだ。即座に立ち上がった伊達は、竹中に「しばらく、くつろいでいてくれ」と声をかけると沢富と一緒に部屋を出ていった。デスクに戻ると沢富に調書を手渡し、自白内容を手短かに話した。沢富は、素早く、調書を一読した。自白の内容からして、これ以上の取り調べは必要ないように思えた。「なるほど。マンションで送信機を操縦し、ドローン爆弾を使って、校長を死に至らしめた」

18

伊達は、眉間にしわを寄せ、尋ねた。「この男、どう思う。警察をからかっているってことはないか？こんな自白は初めてだ。しかも、話が、出来すぎてやしないか？自白だけじゃ、起訴は難しい。ヤツは、このことを承知の上で、やってきたんじゃないかと疑っているんだ。仮に本当だとすればだな～、仲間を裏切ったことになる。ということは、暗殺されてもおかしくない。ヤツは、しばらく泊まりだ。ま～、本当の自白だとしてだな～。検察は、起訴するだろうか？」沢富は、じっと目を閉じ考えていた。「これは、何かありますよ。この男は、T大学医学部卒です。上級国民ですよ。起訴されたとしても、国家はこの男を保護するでしょう。もしかすると、国家が絡んでいるかもしれません」

国家と聞いて、伊達は考えをめぐらした。国家は、この男を使って、何を企んでいるのか？起訴されれば、マスコミの格好の獲物だ。公判になれば、連日のように、校長殺害事件の報道がなされるに違いない。いったい、何が目的なんだ？「国家が絡んでいるとなれば、この男は、起訴されるというのか？」沢富は、大きくなずいた。「この男は、テログループの一員です。その彼が、仲間からの暗殺を覚悟して、自首してきたのです。その動機は、ドローンの操作ミスで、親友を殺害してしまったことへの償いです。余りに



も、話がうまく作られています。自白内容からして、殺意はなかったわけですから、殺人罪にはならず、傷害致死罪で、しかも、執行猶予がつくかもしれません。ほぼ、無罪と同じです」

伊達は、警察が何者かによって、利用されているような不快な気持ちになった。しかも、そこには、国家が絡んでいる。国家も、検察庁も、裁判所も、グルなのかもしれない。いったい何のためなのか？ 公判になれば、メディアは、いったいどんな報道をするのか？反ワクチン派によるテロ事件。参政党によるテロ事件？まさか！ いや、このまさかは、大いにあり得る。メディアは、国家の子飼いだからな。送致すれば、検察庁の動きがつかめる。もし、起訴するようであれば、もはや、国家が絡んでいるとっていい。あの男を送致した俺たちにまで、何か、反動はあるのか？沢富も目を閉じ、考え込んでいた。あの男は、おそらく、身代わり。また、何らかの世論を引き起こす起爆剤に違いない。いったいどんな社会的爆発が起きるのか？

#### おめでた

その日、伊達は、沢富とひろ子と呼んでおめでたのお祝いをすることにした。7時にやってきた二人は、キッチンテーブルについた。ナオ子は、おめでたのひろ子に祝福の言葉をかけた。「ひろ子さん、やったわね。今日は、お祝いよ。パ〜〜といきましょう。まずは、ビールで乾杯ね」ナオ子は、グラスにビールを注いだ。全員がグラスを手にすると伊達は、乾杯の音頭を取った。「それでは、僭越ですが、沢富の上司の私が、乾杯の音頭を取らせていただきます。6月に入籍され、この度は、おめでたという、喜ばしい日を迎えました。おなかの赤ちゃんが、元気に、スクスクと育っていくことを祝いまして、乾杯いたしたいと思います。それでは、カンパ〜〜〜イ」キ〜〜と澄んだグラスの音が部屋の隅々まで響き渡った。

ひろ子は、お礼を述べた。「ご夫妻のおかげで、入籍もでき、子供まで授かることができました。このご恩は、一生忘れません。ありがとうございます」ナオ子が、返事した。「何言ってるの。お二人の仲人ができて、感謝するのは、こちらのほうよ。サワちゃんのお父様に頭まで下げられて、気絶するかと思ったわ。これからも、なんでも、言ってちょうだい。やれることは、何でもやるから。ね〜、あなた」伊達は、大きくなずいた。「大船に乗った気持ちでいてくれ。俺たちには、子供はいないが、いろいろとお世話させてくれ。いいだろ、サワ」

沢富は、笑顔で返事した。「ほんと、結婚できたのは、ご夫妻のお力です。子供の名前

も、いろいろ考えてるんですが、ご夫妻の考えも取り入れます。宜しく願います」ナオ子が笑顔で返事した。「ま～～、嬉しいわ。そうね、男の子だったら、幸太郎は、どう。幸せになれそうじゃない。女の子だったら、さゆりはどう。吉永小百合のさゆり」ひろ子が、返事した。「とつても、いい名前です。候補に入れます」ナオ子が、ひろ子に尋ねた。「ひろ子さんの考えを、聞かせてよ」ひろ子は、いくつか名前を考えていた。「考えてはいるんです。男の子だったら、たけちゃんの一文字を取って、隆史（たかし）。女の子だったら、私の一文字を取って、博美（ひろみ）」伊達が、うなずいた。「なるほど、一般的には、親の一文字をとるよな。いいじゃないか」

19

ナオ子も賛成だった。「いい名前じゃない。私も気に入ったわ。早く、赤ちゃん見たいわ。何人産むの?5人?」ひろ子は、ちょっと顔をしかめた。「何人と言われても。できれば、3人ぐらいは」サワが口出しした。「そうですよ、多くて、3人です。5人は、にぎやかすぎて、手に負えないでしょう」ナオ子が、口をとがらせて返事した。「何言ってるの。昔の人は、8人ぐらい、産んでたのよ。ビッグダディー見てごらんささい。やればできるのよ。今は、チョ～少子化で、ヤマト民族は、滅亡の危機に陥ってるのよ。産める女性は、産めるだけ、産めばいいのよ。私が、手伝ってあげるから。頑張りなさい」

伊達が、眉間にしわを寄せて抗議した。「おい、ひろ子さんは、お国のために子供を産むんじゃないんだ。何、勘違いしてんだ。子供は、多いに越したことはないが、まあ、多くて、5人ってところだ。サワ、頑張れよ」サワが、はにかみながら返事した。「まあ、頑張りますけど、5人は、どうかな～～。ひろ子さんに任せます」ひろ子が、恥ずかしそうに返事した。「3人産めたら、その時に考えます。ヤマト国のために、産んじやおうかな～～」ナオ子が、マジな顔で応答した。「その意気よ。バンバン、産みなさい。野球チーム目指すのよ」サワが、目を丸くして、返事した。「それは、ちょっと。子育てには、お金もかかることですし」

伊達が、応答した。「おい、何言ってるんだ。金持ちのくせに。お父様の援助もあるじゃないか。まあ、多すぎるのもなんだから、ひろ子さんに任せて、サワは、ガンガンイケよ」サワが、顔を真っ赤にして、返事した。「先輩、ちょっと、言い方が、卑猥ですよ。子供は、神からの授かりものなんです。カトリックでは、子供は、神の子でもあるそうです。神から授かった子供を育てることが大切なことなんです。そうですよね、ひろ子」ナオ子が、びっくりした声を上げた。「ま～～、ひろ子、だって。あ～～、いいわね。新婚は、新鮮で。あなた、私にも、言って、甘～～く、ナオ子って」伊達は、あきれた顔で返事した。「何言ってるんだ。この年で、うらやましがって、どうする。まったく」

ひろ子は、クスクス笑っていた。ビールを飲み終えたナオ子は、すき焼きのお肉を勧めた。「佐賀牛よ。しっかり食べて、栄養を取って、元気な赤ちゃんを産んでちょうだい。母親の栄養が、赤ちゃんに行くんだから」ひろ子は、笑顔で返事した。「はい、しっかり食べて、元気な赤ちゃんを産みます」伊達が、ウクライナ戦争の話 시작했다。「ウクライナ戦争は、いつまで続くんだ。ガソリン価格は、跳ね上がるし、円安は続くし、輸入品の値段は、上がる一方だ。困ったもんだよな〜」沢富が、うなずいた。「物価高は、ウクライナ戦争と円安が原因ですね。今後、飼料にに用られる小麦、トウモロコシ、などの輸入量が減少すれば、酪農家は、やっていけなくなります。また、畑に用られる肥料が不足すれば、農家も打撃を受けます」

ナオ子が、応答した。「食糧の輸入もできない、肉、野菜の自給もできなくなれば、国民は飢え死にするじゃない。政府は、何考えてるんでしょうね。ガソリン価格の補助は、ありがたいけど、農家や酪農家を助けてあげないと、本当に、大飢饉がやってくるんじゃない。怖いわ〜」沢富が、眉間にしわを寄せ、マジな顔で話し始めた。「大飢饉は、現実には起きる可能性があります。戦後のように、食糧配給制になるかもしれませんね。田舎に引越して、自給自足生活の準備をやったほうが賢明かもしれません」伊達が、目を丸くして口をはさんだ。「マジかよ。本当に、大飢饉が来るのか?田舎といつてもな〜。急には、引越してできないしな。糸島に引越すつ、てもあるけどな」

ひろ子は、飢饉のほかに地震を心配していた。「飢饉も怖いけど、地震は、近々、来るんでしょうか?地震に備えるって言つても、何をすればいいですか?食料の備蓄ですか?福岡にも、地震が起きますか?」沢富が、返事した。「確かに、熊本地震の被害は大きかったですね。福岡にも起きないとは限りません。万が一のことを考えて、食糧の備蓄は必要です。それと、リュックに食糧、飲料水、貴重品、下着類、などを詰めておくとか、情報を取るためのラジオ、夜のことも考えて懐中電灯、足元が悪いので長靴、手をケガないように軍手、落下物から頭を守るヘルメット、準備できるものは、できる限りやっておいた方がいいですね」

20

ナオ子は、暗い雰囲気吹き飛ばそうと糸島への引越しの提案をした。「こうなつたら、糸島に引越しましょう。糸島は、まだ、土地も安いし、古屋で土地付きの物件があるんじゃない。お父さんに頼んでおくわ。いざとなれば、片田舎で自給自足をすればいいのよ。私たちは、子供は、いないし。近くに病院さえあれば、いいんじゃない」伊達が、頷いた。「それは、名案だが、お父さんに頼つてばかりで、気が引けるな〜。いいのか?」ナオ子は、大きな声で返事した。「いいのよ。お父さんは、娘のためなら、何でも

してくれるんだから。そんなに、気を使わなくていいのよ。子供は欲しいけど、二人の人生を考えましょうよ。残りの人生をエンジョイしなくっちゃ」

沢富も賛成だった。「先輩、お父様に甘えられたら、いいんじゃないですか?将来は、ご夫妻が、お父様の面倒を見られるんでしょ」伊達が、頷いた。「そりゃあ、そうさ。ここまで、お世話になって、お父様の面倒を見なかったら、地獄に落ちる。ナオ子、お父さんの老後の世話は、俺に任せとけ。今までの恩を返させてくれ」ナオ子は、笑顔を作り、返事した。「そう、お父さんに今の言葉伝えておくわ。お父さん、きっと喜ぶ。前々から、お父さんは、年を取ったら、いなか暮らしをしたいな～、と言ってたし。そして、家庭菜園をやりたいって、言ってた。きっと、いい物件を見つけてくれると思うわ」

沢富が、うらやましそうに話をつないだ。「いいお父様がいらして、幸せじゃないですか。先輩。田舎暮らしをされたら、僕たちを呼んでくださいよ。いいだろうな～。田舎暮らし。僕は、都会で生まれて、都会で育ったから、田舎暮らしに、あこがれてるんです。僕は、一生、福岡で暮らします。先輩、おじいちゃんになっても、仲良くしてください」伊達が、苦笑いをしながら返事した。「おいおい、何を言ってんだ。お前は、エリートなんだぞ。俺とは、訳が違う。日本の警察を背負って立つヤツだ。大きく羽ばたいて、日本を守ってくれ。もう、手遅れかもしれんが、政府も、裁判所も、検察庁も、警察も、医師会も、経団連も、腐ってしまった。このままじゃ、アカで汚染された日本は、消滅だ」

ひろ子が、気まずそうに応答した。「そうよ、サワちゃん、私のことなんか、気にしないで。いずれは、警察庁長官になれる人なんだから。お父様も、期待されていると思うわよ。私は、どんなところででも、ついていくから。心配しないで」伊達は、ひろ子の気持ちを察して、話を変えた。「さっき、日本は消滅すると言ったが、北海道も、沖縄も、かなりの土地が、アカ外資に買収されている。このまま、円安が続き、ますます、不景気になれば、農家も、酪農家も、中小企業も、倒産だ。こうなれば、土地は下落し、東京の土地も、大坂の土地も、福岡の土地も、アカ外資に、買収されてしまう。どうなるんだ、日本は」

顔を青くしたナオ子は、尋ねた。「マジなの?それって。土地が買収されたら、そこには、外資の企業が設立されるだけでなく、外国人が住むってことよね。外国人の土地に日本人が住むってことになれば、肩身が狭くなるじゃない。一体どうしたことよ。ここは、日本人の土地なのよ。歯がゆいって、ありゃしない。もう、手遅れなの?」伊達は、肩を落として返事した。「おそらく、手遅れだ。日本は、中国のウイグル地区と同じだ。日本地区だな。日本人は、低賃金で過酷な労働を強いられるだろうな。それに、下手すりゃ、国民年金も、国民健康保険も、無くなるかもしれん。全く、情けない」

日本の青年たちが奴隷のように働かされている姿が、ひろ子の脳裏に浮かんだ。しかし、即座に、その映像を打ち消した。日本は、神の国だから、きっと神様が日本国を助けてくれると固く信じた。「私は、そうはならないと思います。日本は、神の国です。きっと、救世主が現れます。信じるのよ。日本の神の力を。決して、外国に、屈してはいけない。元寇の時でも、神風が吹き、神は、日本を救ってくれたじゃない。日本は、絶対、負けない。日本人は、頭もいいし、お国のために戦うヤマト民族じゃない。ヤマト民族としての誇りを持つのよ。気持ちで負けたら、おしまいよ。絶対に勝つ、と心に誓うの。巻き返しは、これからよ。子供たちのためにも、頑張りましょう」深刻な表情で聞き入っていた三人は、そろってうなずいた。

---

ドローン爆弾殺害事件

---

著 春日信彦

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---